

『辛抱の一年』

新型コロナウイルスの一年。昨年春からの、この令和二年度を、私たちは長く、そのように記憶するだろう。世界中がこのウイルスの影響を受け、医療のみならず、社会生活の有りようをも変えざるを得なかったのである。

マスクの一年。人々は常にマスクを付けて行動し、出会う人達の口元を見ることは無かった。そして表情を読み取るために、おのずと目をのぞき込む。その結果誰もが、『目は口ほどに物を言う』を、改めて実感することになった。

距離と遮断の一年。密を避けよう、社会的距離を保とう、と世の中はかしましい。オンラインの会義が整備され、昭和育ちのアナログ人間も戸惑いながらも参加することになった。不要不急は放っておけ、食事は沈黙の内に終わらそう。誠に、このウイルスは人と人との繋がりを、親交を阻止することが拡散の目的ではないかと思えたりする。そもそも不要不急のことに手を出すのが人間らしいということではなかったのか。「膝を交えて」とか、「腹を割って」という言葉はもう消えてしまうのか。

勇気の一年。そんな人間関係が希薄となってしまうような世の中でも、多くの勇者たちがウイルスと戦っている。風評被害など恐れることなく、病める人達のために働く者、大きな経済的打撃を受けながらも、感染の拡大防止のために営業を控える人達など、その数は数えきれない。彼らの勇気は必ず報われなくてはならない。昨年来、漫画やアニメの『鬼滅の刃』が空前の支持を受けてきたのは、それは決して偶然ではない。老若男女を問わず誰もが、今は戦いの時だと感じているのではないだろうか。鬼と戦う仲間達に、煉獄さんは言うのだ、『心を燃やせ』と。

辛抱の一年。今は皆が自分の気持ちを抑えて行動すべき時である。しかしそれは「我慢」ではない。「我慢」というのは自分の欲望や気持ちを外部からの圧力によって押さえつけられた状態であり、それは不満や怒りを生み、やがて限界が来ると爆発する危険がある。それに対して「辛抱」は、より良い未来を見据えて今を耐えることであり、胸を張って頭を上げていなくてはならない。現在、病院は感染防止のために面会禁止としている。家族や親しい人達の直接の励ましは患者さんの療養において大きな癒しとなり、またいかに重要であるかを知っている我々医療者にとって、ウイルス対策のためとはいえ、この決定には断腸の思いがあった。病院は患者さん達に多大な「辛抱」を求めていることを忘れてはならない。

このような状況が一体いつまで続くのか。果たしてワクチンの効果は期待できるのか。新しい年度を迎えるにあたり、不安は多く気分もすさみがちになる。しかし、それでも、今年も春は来る。昔の人は言った、『辛抱する木に花が咲く』。春を待って咲く花の美しさを愛でる心だけは、何があっても失ってはならないと胸の奥深く思うのである。